２０１６年5月２３日

原告の意見陳述

この裁判が始まるに当たり、以下の通り、私の意見を述べます。

２０１３年３月、防衛大学校の合格通知書が手元に届きました。夢をついに実現でき、私は嬉しさと同時に、これから待ち受けている世界に身が引き締まる思いを感じたのをよく覚えています。

防大に合格するために高校３年間ずっと努力をしてきました。勉強はもちろん、訓練に備えて山道を走るトレーニングもほぼ毎日頑張り、体力面でも十分に力をつけておきました。防大では、物理や受験科目であるのを見越して、１年の時から物理部に所属し専門的な勉強も頑張りました。そんな努力の末、合格通知書を手に入れ、門を通り見えた防大の建物はとても輝いてまぶしかったです。たくさんの知識を身につけ人の役に立つ人間になりたいと思いました。

しかし、ひと月もしないうちに防大の建物は塀で囲まれている小原台の牢獄に見えてきました。防大用語で「脱柵（だっさく）」という言葉があります。防大の敷地から無許可で外へ逃げ出すこと。脱柵が発覚すると防大内では、けたたましくサイレンが鳴り響き放送が流れます。私はそれを聞くと「脱獄（だつごく）だ・・・」と思っていました。防大の実像は、私が憧れ思い描いていたのは全く異なり、酷いものだったからです。「指導」という名のもと上級生が下級生に「明らかに人権侵害」を行っているということです。教官も見て見ぬフリだとすぐにわかりました。

着校日から５日後、入校式に参列するため父、祖母、祖父が福岡からやってきました。父たちは早くに防大についており門の前で開くのを待っているとき、異様な光景を目の当たりにしてとても驚いていました。大きな荷物を抱え、入校式を迎えることなくタクシーで来られた家族と学生が帰って行く様子でした。この日だけで８０名ほどの同期がいなくなったと記憶しています。祖父は普段は壁づたいに歩くような健康状態なのに、無理をして飛行機に乗り、はるばる横須賀まで来てくれたこと、心配そうに「大丈夫ね？」と聞く祖母の顔を見ると、とても本当のことは言えず、私は家のものを心配させまいと「大丈夫、大分慣れてきた」と告げると安心したように「がんばれよ」と言い、帰って行きました。

「防大は１年間がとても辛い、１年過ぎれば後は楽になる」と誰からも言われていたので、私も「よし、１年間絶対頑張り抜いてみせる」と強く思いました。１学年の時は、理不尽なしうちにただただ辛抱するのみでした。あまりに酷い仕打ちを受けたときは、夜就寝する時、「これは夢で、現実ではないんだ」と何度も心で繰り返し思うことで少し楽になり寝付くことができました。そして、支え合っていた同期の存在もとても大きかったです。愚痴をこぼし、慰め合い、励ま

しあった同期がいたからこそ頑張ることができたと思います。

しかし、２年生になり今度は自分たちがされたことを１学年にしないといけない立場になるとは、思ってもみませんでした。普通の人間が防大の生活で人の痛みに鈍感になり、モンスターへと変貌していく・・・。恐ろしい大学だと思いました。

二大隊になり、同期の多くは日頃のうっぷんを晴らしているように、暴力を振るい、人を傷つけて喜んでいる、そんな姿を見ていてとても悲しくなりました。このような人間が幹部になり、部隊の指揮をとっていてはいけないと思います。

「服従の誇り」だと思っていたものは実際には「絶対服従」であり、思考を停止させられ命令に従うように教育されていかれるようで、だんだんと何が正しくて、何が間違っているのかわからなくなることもありました。

防大では、最後の希望であったカウンセラーも何も動いてくれず、やられる一方で仕返しさえできない状態がずっと続くと、「相手の存在を消すか？自分の存在を消すか？」しか考えつかないようになっていきました。あの地獄から母が引っ張ってくれなかったら、今自分はここに存在しなかったかもしれません。

福岡に帰ってきても執拗にしてきた嫌がらせは今でも酷く私を傷つけています。私が福岡で生活することが咎められているようです。

私がこの裁判で明らかにすることは、氷山の一角にすぎません。他の部屋では目も耳も覆うような出来事があり、私はその人たちの思いも込めて裁判しているつもりでいます。刑事告訴の処分結果が知らされた時、こんな酷い目にあっても１０万、２０万の罰金刑なのか？日本という国はこんなところなんだと思いショックを受けました。こんなことなら、あの時、殴り返しておけばよかった・・・と酷く後悔しました。手を出すことを止めていた母に対して「どうして止めたりしたんだ」となじり、悔しい気持ちをぶつけたこともありました。

しかし、暴力を暴力で返さず、被告らと同じ土俵に立たず我慢したから、今こうして法の下で、自分の気持ちを述べられる機会ができました。このようなことがある日本のままでいいのか、変わらなくてはならない、変えなくてはいけないと思います。このまま、次の世代に受け継いでいくのは絶対に止めないといけないと思っています。

私が防大生になるために努力した日々、防大生になってから辛抱し続けた日々は無駄ではなかった、意味のあったことなんだと信じたいです。

防大内でも基本的人権は尊重されるべきで、私たちのようにいたずらに苦しい学生生活を送ることがないよう、人の命も、自分の命も大切にできる人間を育てる大学校に変われるよう、正しい判断を裁判長に下していただきたいと願っています。